

## 日・英語間における オノマトペの落差について（下）

安井 稔

Yasui Minoru

### 4. 声帯模写とオノマトペ

自然音をそれに最も近い形で再生しようとする、声帯模写の世界となる。擬音語 (onomatopoeia) の世界は、近年、オノマトペの名で総括され、事物の音や動物の鳴き声を表すものとされている。そうすると、声帯模写の世界とオノマトペの世界とは、大きく重なっているという印象を受ける。事実、世間では一般にそう考えられているかと思われる。が、両者は、全く異なる別の世界である。

両者を分けているのは言語という壁である。声帯模写の世界は言語以前の世界であるのに対して、オノマトペは言語化された世界であり、言語の一部を成している。言語化されていない、言語以前のただ自然音をまねるだけの声帯模写は、当然のことながら万国共通である。

これに反し、オノマトペの世界は言語化という操作を経たあとの世界であるから、言語の網目が異なれば、異なる網目ですくい上げられるオノマトペは当然違ったものとなる。ここまで

の推測は想定範囲内のものであるとしてよい。

問題は、そのあとにある。同じく言語化といっても、言語ごとの、いわば、「くせ」があるからである。英語と日本語とでは、それぞれの言語の中でオノマトペが占めている、いわば、比重が異なる。立ち位置が異なるといってもよい。思い切った乱暴な言い方が許されるなら、英語の場合、オノマトペといってよい語をすべて削除してしまっても、結果は小さなかすり傷を一つ負ったぐらいで済むと思われる。日本語の場合はどうか。話を日常会話に限ってみると話が立ちゆかなくなるというほどのことはなくても、極めて精彩を欠くものになるであろうことは、容易に想像されるところである。既出の(2)に挙げたような語が、すべて禁句となった場合を想像するだけでも、ある程度察しはつくであろう。

小説やエッセーなどの文学作品の場合も、かすり傷程度では済まされないであろう。童謡の「あめふり」にみられる「ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン」は、英訳不能である。それをなんとか英語で表現しようとする、どれほどたいへんなことになるか、ということに関しては、すでに触れた。しかも、この「ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン」はこの童謡の、いわば、心である。この部分を削除すればこの童謡は死ぬ。

日本の小説を英訳する場合、あるいは英語の作品を日本語に翻訳する場合、オノマトペの部分に焦点を当てて両者を比較するならば、翻訳の方向性、すなわち、日本語から英語へか、英語から日本語へかということにかかわりなく、オノマトペは英語におけるよりは日本語におけるほうが圧倒的に多いということが判明するに至るであろう。もしもここで具体的な多くの例に

ついて比較検討を加えてゆくなら、日本語の場合、オノマトペを削除すると、思っていることが十分に表現できず、相手にも伝わらないというもどかしさが残るように思われる。これに対し、英語のほうはオノマトペ表現を用いたくても、語彙化されているオノマトペ表現が用意されておらず、使いたくても使えない状態にあると思われる。

もちろん、日本語のオノマトペ表現が、英語のオノマトペ表現に1対1の関係で対応しているという場合はあるが、この場合、二つの点に留意する必要がある。一つは、対応がみられる場合と、対応がみられない場合とを比べると、対応がみられない場合のほうが、圧倒的に多いであろうという点である。対応していない場合、オノマトペ表現がみられるのはどちらの言語かということ、それは間違いなく日本語のほうであると断定して差し支えないであろう。

もう一つの留意すべき点は、両言語に対応するオノマトペ表現が存在するとした場合でも、両者の間にはかなりはっきりした質の違いがあるということである。これは、従来、ほとんど注意されることのなかった点であるとしてよい。結論的にいうなら、英語のオノマトペに比べ、日本語のオノマトペは、より自由で自然音との距離はより近いといえるであろう。これに比べ、英語のオノマトペのほうは語彙化という、いわば、足かせをはめられている分だけ、自由がきかず、窮屈で自然音からの距離は遠く、それだけ抽象化されていることになる。

日本語では、いわば即興的にいくらでも、オノマトペ表現を作り出すことができるが、英語ではそれができない。例えば「彼はまたわははと笑った」というオノマトペ文をそのまま英語に訳すことはできない。「北風小僧がやってきた。ピュー、

ヒュルルン、ヒュルルン、ヒュルルンルン」なども全くのお手上げであろう。「ホーホケキョウ」といえぼうぐいすの鳴き声である、と我々は信じて疑わない。では対応する英語のオノマトペ表現はどうか。一瞬信じがたい気もするが、英語にはあっけらかんと対応するオノマトペ表現は、存在しないのである。

類例は限りなくある。「ことごと」と「ごとごと」、「かりかり」と「がりがり」、「ぽとぽと」と「ぼとぼと」、「ぺらぺら」と「べらべら」等々のペアでは、その使用領域の違いがあまり明確ではないと思われる場合もでてくる。が、「彼は英語がべらべらだそうだ」の代わりに「彼は英語がべらべらだそうだ」とはいわない。「あれほど黙っているといったのに、ぺらぺらしゃべって……」と「……べらべら……」などと比べると、「ぺらぺら」には「軽薄」という含みがあり、「べらべら」には批判の意を含むマイナスのイメージが結びついているかと思われる。いずれにせよ、既出(2)に挙げた諸例を含め、こういった広大なオノマトペ表現の世界は、ほとんど丸ごと、英語表現の世界から抜け落ちているとってよいであろう。

日本語にはあって、英語にはないとしたこの広大な領域の存在・非存在が、日本語・英語という言語そのもの、および、それらの言語によって支えられているそれぞれの文化に、大きな影響を及ぼしていないはずがないと考えられる。

言語の側に立ってみると、言語によって表現することのできる世界は語彙化以後の世界である。語彙化という関門をくぐり抜けられない限り、英語の場合、言語による表現はできない。用いるべき単語がないからである。「春の小川がさらさら流れ」でも「春風がそよそよ」吹いても英語には「さらさら」とか「そ

よそよ」に当たる語が存在していないのであるから、表しようがない。「なしで済ませる」しかないのである。それで日常生活が特に困るということはない。ちょっと先回りをして断っておくなら、これによって日・英両言語の言語としての優劣を論じようとしているのではない。

誤解を避けるため付言しておく、英語にオノマトペが全くないと、主張しようとしているのではない。ただし、存在しているのは語彙化という過程を踏んでいるものに限られるという大原則は動かない。が、この大原則に違反しているオノマトペは皆無であるか、とさらに問われるなら、例外はもちろんある、と答えなければならない。

例えば「うしろからコツコツという足音が近づいてくるのが聞こえた」は **I heard someone's footsteps approaching from behind.** でよい。でも「コツコツ」という音をどうしても表したいときにはどうするか。「どうしても表したいとき」と書いたが、英語国民は通例「どうしても表したい」とは思わないと考えるのが正しいであろう。せいぜいのところ、次の(6)に示すような表現にとどまるであろう。

#### (6) **I heard someone's footsteps approaching from behind — click, click, click.**

日本語にも、英語にも、オノマトペ現象は存在する。このことを知ったとき人々の興味は同じ犬やニワトリの鳴き声であっても、日・英のオノマトペ表現は全く異なっているという点に向けられる。が、この雑学的好奇心が満たされると、その知的探究心はそこで燃えつきてしまう。この傾向は程度の差こそあ

れ、言語学的なオノマトペ研究においても払拭されるには至っていないように思われる。

### 5. 不自由な英語のオノマトペ表現

これまで述べてきたところからも明らかであるように、英語のオノマトペは、日本語のオノマトペに比べ、かなり「不自由」なのである。数量においても、種類においても、デリケートさにおいても、英語のオノマトペは日本語のオノマトペに比すべくもない。笑い声一つをとってみても、「わはは・いひひ・うふふ・えへへ・おほほ」など、みんなニュアンスが異なる。通例「おほほ」を男性に用いることはないし、「うふふ」や「えへへ」を女性に用いることもあまりないであろう。これらのオノマトペ表現に帰せられるのは、情的な意味であって、明確な定義を許す知的な意味ではない。

これに対し、語彙化という条件を課せられている英語のオノマトペ表現は品詞の区別を与えられ、定義によって規定される知的な意味を付与されている。ここで問題となってくるのは、日本語は、語彙化という文法的過程がどれだけ確立されたものとなっているか、ということであろう。このことに関し、定説と呼べるほどのものはないといってよいように思われる。したがって、以下述べることはおおよその見当をつけるというくらいにとどまるであろう。

### 6. 日本語の語彙化について

比較的確かなのは、英語の語彙化現象に比べ、日本語におけるそれは、確立の度合いがずっと低いという点であろう。が、語彙化という現象が日本語にはない、といえは言い過ぎ

で事実と反することになるであろう。オノマトペとの関係に限っていうなら、繰り返しになるが、英語の場合は、語彙化という厳しい制約によってかなり窮屈なものになっている。この場合、「窮屈な」といっているのは、「英語という言語」についてであって、英語国民についてはない。膨大な数に上るオノマトペ表現が日本語には存在するが、英語には存在しないという事実と英語国民は通例気づいていないといっただけ。気づいていないことに窮屈さを感じないはずもないということである。

他方、限らない数に上るオノマトペ表現に恵まれ、その上、即興的にいくらかでも新しいオノマトペ表現を作り出す能力を身につけている我々日本人は、その心情においても日本語の使用においても、(英語国民とは逆の意味において) 窮屈さを感じることはないはずである。英語も日本語もそれぞれに満足し、めでたく充足していることになる。

これまで「語彙化」という用語を、定義らしい定義を加えることもなく、しばしば用いてきた。が、この概念を最も常識的な、最も早わかりのする形で示そうとすると、どうなるであろうか。それは最も簡単な形で述べるとすれば、「普通の辞書(この場合、普通の国語辞書と英語辞書)に見出し語として収録されている語」ということになるであろう。

ただ、いくつかの注釈を必要とする。まず、古くから存在し、それぞれの言語において語彙項目、つまり普通の単語として認知されているものはどうの昔に語彙化というプロセスを卒業しているものであり、問題とはなりえない。問題となるのは、辞書の見出し項目として、あらたに加えるべきであるか、加えずにおくべきであるか迷うような場合である。こういう背景の中でオノマトペ表現をみると、どういうことになるであろうか。

うか。

すでに述べてきたところからも明らかであるように、英語の場合、新しいオノマトペ表現が、辞書における新しい見出し項目として受け入れられる可能性は極めて低いといっただけであろう。これに反し、日本語の場合、オノマトペ表現が辞書の見出し項目として受け入れられる道は広く、ゆるやかである。使用頻度が高く、辞書に記載があれば便利と思われるものであれば、どんどん見出し項目として受け入れられることになる。これは片仮名語の場合も同様で、オノマトペ表現に限るわけではない。しかも、日本語の場合、実際に辞書項目として採録されるに至らなくてもいつ採録されても不思議はないという、いわば、採録予備軍が数限りなく控えているという事実がある。

ほんのちょっとだけ、具体的な例をみておくことにしよう。「心が明るく、はずんでいる状態」を「るんるん(気分)」というが、戦中・戦前には耳にした覚えがない。今度はやや別の角度から次の(7)をみることにしよう。

- (7) a. あはは
- b. いひひ
- c. うふふ
- d. えへへ
- e. おほほ

やや別の角度からといったのは、これらのオノマトペ表現が例えば『広辞苑』のような辞書に見出し項目としての記載があるか、ということを手探りに問うてみたらどうなるか、ということである。換言すれば、(7)に挙げた表現は日本語の語彙項目として問題なく認知されているか、ということである。ややため

らいながら広辞苑を引いてゆくと(7)の表現はすべて収録済みであることがすぐ分かる。

問題は、(7)の表現を示されたとき、それらがすべて収録済みであることを100パーセントに近い確率で予測しえた人々はほとんどいなかったのではないかという点にある。「むっちり」は収録済みであるが、「もっちり(感のあるうどん)」はまだである。こういうことは、英語の世界に関する限り、ほとんど考え及ばない現象であるといつてよいように思われる。

## 7. 語彙化における日・英の落差

以上を要するに、英語における語彙化の壁は厚く、日本語におけるそれはなきに等しいということである。現実世界との距離という観点からみると、日本語は現実密着型といつてよく、英語は現実世界と常に一定の距離を保ちながら、日本語と比べれば抽象度の一段高いレベルで語彙化が行われているということになる。

どちらの言語が言語としてより優れているか、という問題は興味をそそるものであるが、別次元の考察を必要とするものであり、ここではこれ以上立ち入らないことにする。が、事実の問題として、英語では表現できないが日本語では表現できるという膨大な領域の存在することは否定できないであろう。

それはすでに明らかであるように現実世界に密着しているほうの分野である。一般に言語学の通説となっているのは、表現したいと思うことは、すべて自前で表現することができるというものであった。これはいわゆる先進国の言語と、いわゆる未開言語との間に、表現したいと思うことを表現するという能力に関する限り、差は認められないという主張であった。どの言

語もそれぞれに充足している(self-contained)ということである。

もしもそうであるとする、日本語では表現できるのに英語では表現できない広大な領域があるという事実はどのように説明されるべきであろうか。これを英語という言語の構造に由来すると考えるのは、上の大原則にも反するし、おそらく正しくないであろう。

「日本語では表現できるのに英語では表現できない」とすぐ上で述べたが、これは十分に正しいであろうか。ちょっと考えればすぐ分かるように、無視できない疑義の余地がある。例えば「ホーホケキョウ」に当たる英語はない、と上で述べたが‘hohokekyo’ とすれば一応の表記はできるはずである。「ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン」も‘pitch pitch chap chap lun lun lun’ とすれば、Happy am I! のような別次元のいわば苦しい表現に頼ることなく、新しい心的世界を切り開くことができたのではないか。

ところが、アングロサクソン民族は、そういうことをしなかった。どうしてであろうか。そういうことに興味をいだかなかったからである、としかいいようがない。路傍に咲いているすみれをみつけて、「あ、すみれの花だ」と腰をかがめてしゃがんだのは日本人留学生だけであった。これは1960年代、米国インディアナ大学にいたころのおぼろげな記憶である。そういうものはアメリカ人にとってはすべてweed(雑草)であるにすぎなかった。せみの鳴き声など種類を問わず、いやな雑音(noise)とされるであろう。「あぶらぜみ」、「いにいぜみ」から、「つくつくぼうし」、「かなかな」に至って、しのびよる秋を知るなどという風情も無縁であろう。かつて、日本映画の好

きであったアメリカ人が「でも、耐えられないのは、しょっちゅうでてるやかましいせみの鳴き声です」というのを聞いて、妙に感心したことを覚えている。

アングロサクソン文化との対比においてとらえるとき、自然界と密着した広大な領域が日本語および日本文化に特有なものとして浮かび上がってくる旨を述べてきたが、これこそ、「やまと心の領域」の名で呼ぶにふさわしいものであることに、あらためて気づかされる。それが、抽象的、観念論的議論から出発して得られるに至ったものではなく、極めて、低次元の、自然世界に密着したオノマトペ現象から、出発しているものであるだけに、いわば、足が地についたままの形で、納得することができるように思われる。

このようにみえてくると、従来、西洋文化との対比において日本文化に特有であるとされてきたもの、あるいは日本文化の内なる心の具現化されたものといったような、やや抽象的なことばで語られてきたことが、ほとんど、すべて、上で触れた「やまと心の領域」と結びついてくるように思われる。

繰り返し述べるが、この「やまと心の領域」というのは、少なくとも、アングロサクソン文化においては、見事に欠落している領域である。例えば、俳句の世界はどうであろうか。俳句が、身近に広がる自然をスケッチしようとするれば、やまと心の領域と深くかかわってくることは、当然、予想される場所である。ところが、最近、英語国民の間でも俳句人口がかなりの数に上っていると聞く。以下、予測の域を出ないが、そういう外国人の作句の中から、日本人なら決して俳句にはしないとされる句、あるいは、どうみても、これは俳句ではないと思われる句を集めてみたとする。そこから導き出されるのは、「反

やまと心の領域」とでもいうべき世界であり、その存在によって、逆に、やまと心の領域の存在証明になるかもしれないことを思わせる。

一般に、日本文化の解きがたさを象徴しているといつてよい「わび」、「さび」、「せつなさ」、「いじらしさ」、「やるせなさ」などの概念も、やまと心の領域と深く結びついていると考えられる。やまと心の領域内の事象は、やまと心の領域外のことばでは、説明不能であるか、説明が極めて困難である。ことばで説明できない、あるいは説明が困難な感性の問題であるから、説明できなくても、いたし方がないといつてよいであろうか。

世界的な日本漫画ブームといつてよい現象も、これをオノマトペ的観点から分析を加えてゆくなら、興味ある発見が期待できるかもしれない。すなわち、日本発のオノマトペ表現が、対応するオノマトペ表現をもたない言語において、どのように理解され、処理されているかという問題である。が、詳細は、今後の研究にゆだねなければならない。

## 8 結語——新しいコミュニケーション論について

日本語では表現することができるが、英語では表現することができない広大な領域が存在することは、すでに明白であるといつてよい。当然のことながら、この領域に関する限り、日本語をそのまま対応する英語に翻訳することは不可能である。このことは、この分野に関する限り、直接的なコミュニケーションは不可能であることを意味する。

もちろん、「説明する」ということはできる。が、それは、「英語によるコミュニケーション」とは別次元の問題であり、ここでは立ち入らない。が、あらためて問題となってくるの

は、コミュニケーションが不能となると、それらの言語は言語としての価値や存在理由を喪失するに至るか、ということである。答えだけ、先に示すと、そういうことはない。

一般に、世間では、「言語の機能はコミュニケーションにある」と、しばしば、主張されるが、これは、むしろ、誤りに近い。正しくは、「言語の一次的な機能は、自分の思考を整理し、まとめ、表現するにある」というべきであろう。自分の考えをまとめあげている表現をコミュニケーションの具として用いるのは、もちろん、全く、差しつかえない。日本語に特有の擬態語や擬音語が、コミュニケーションのチャンネルから外れることがあっても、それによって、言語としての資格を失うに至るのではないことも、すでに、明らかであろう。

日本語に特有の、したがって、英語に翻訳することは、通例、不可能である広大な領域が存在しているという事実は、英語を外国語として学習する際においても、十分に、考慮されるべきであると思われる。特にコミュニケーション能力の達成を標榜している英語教育にとっては、従来、全く、考慮されることのなかった点であるだけに、さらにいっそう、重大な問題となってくるであろう。

日本語に特有な擬態語や擬音語を含むやまと心の領域は、通例、英訳不可能である旨を繰り返し述べてきた。英訳不可能であるなら、当然、英語では表現できない。英語で表現できないことは、英語を用いて伝達するというわけにも、ゆかない。もともと、英語では伝達することができないということがあるからといって、それを、コミュニケーション能力低下の証拠とすることはできない。

このような事実を前にしたとき、コミュニケーション能力の

向上を意図する学習指導に期待される方策として、どんなことが考えられるであろうか。

手短かに結論だけ述べるなら、「やまと心の領域には、できるだけ、近寄るな」、「やまと心の領域に近づきそうになったら、話題を変えよ」といったことになるであろう。が、すぐに反論されるであろう。それでは、日本固有の優れた文化を外国人に紹介する絶好のチャンスを失うことになるのではないか。それは、そのとおりである。が、日本固有の文化を海外に紹介するという仕事は、会話の片手間にできるというようなものではないであろう。それは、ここで考察の対象としてきたようなコミュニケーションとは別個に、時間をかけ、心を傾けて、行われるべきものであろう。

やまと心の領域に切り込んだ形で会話を続けようとする、会話は、たちまち、渋滞におちいるはずである。レールの敷かれていないところに電車を突っ込ませるようなことになるからである。もっといいうなら、日本人は英語が下手だとか、学校で10年英語を習っても電話一本かけられないとよくいわれるが、そしてそれに違いはないのであるが、やまと心という広大な「英語立ち入り禁止区域」の存在を考慮に入れることにしてこなかったという点にも、責任の一端がある、といってよいであろう。

では、「英語立ち入り禁止区域」を注意深く避け、会話を進めるとしたら、どういうことになるであろうか。英語というレールに乗ったまま、外れることなく、その分だけ、なめらかに会話が進展することは請け合いである。同時に、会話が無事完了したとき、なにかしら心の底に一抹の不消化要素、つまり、いべきであったのにいえずじまいになったこと、といった感

覚が残るのではないだろうか。この、ちょっと「腹ふくるるわざ」といったものは、英語学や言語学の論文を書いたり読んだりしているときには、感じないものである。いずれの場合も、やまと心の領域と名づけた部分が、現実世界に隣接している部分にみられるということを思わせる。

(東北大学名誉教授)